

【1】河川工事の人身御供第一号

5世紀初頭、仁徳天皇が文字に残る河川改修工事の嚆矢として淀川の堤防工事（茨田(まんだ)の堤)を始めたが、堤防を築いてもすぐ壊れるという具合で工事が難航した現場が2ヶ所あった。

天皇の夢に、武蔵の人「強頸(こわくび)」と河内の人「茨田連衫子(まんだのむらじころものこ)」の2人を川の神に捧げれば工事が出来るとあったので、2人を人身御供にすることにした。

人の良い(?)強頸は泣き悲しんで素直に水に沈められ、その工事は完成した。

一方、衫子は瓢(ひさご。ひょうたんのこと)を持って工事現場に臨み、「川の神が祟るので私が生贄にされることになったが、どうしても私が欲しいのならこの瓢を水に沈めよ。そうすれば私も納得して水に入ります。もし瓢が沈められないなら偽りの神と思ってこの身を犠牲にはしません。」と言って瓢を川に放り込んだ。

つむじ風が巻き起こって瓢を水中に引きずり込もうとするが、瓢は波の上を転がるばかりで沈まず遠くへ流れ去った。衫子は死なずにすみ、工事も無事完成した。

衫子の知恵が神意に勝ったのである。

当時、武蔵の国には技術を持った高麗人が朝鮮の地から移住しており、強頸はその技術を見込まれて遠い近畿の工事に派遣されたのだろうが気の毒な結果となった。

地元の河内の衫子は現代の関西人にも通じる才智(頓智?)で危機を脱した。

この話は、時代を経ても悲劇の中に何処か現代にも通じる一抹のおかしさがあり、これを記した日本書紀の著者はどういう意図で後世へ伝えたのか気になるところである。

蛇足ながら、仁徳天皇は紀元420年に即位したと推定されているが、本年はちょうど1600周年になる。

(出典：『現代語訳日本書紀』宇治谷 孟、講談社学術文庫)